
研究活動報告

2018年数理生物学会および日本数理生物学会合同大会

2018年7月8日～同年7月12日にオーストラリア、シドニーにあるシドニー大学で開催された。数理生物学会および日本数理生物学会合同大会2018年に参加・報告を行った。この大会は北米・ヨーロッパを中心とする数理生物学会と日本数理生物学会が合同に行った学術会議である。報告者は「構造化人口モデルにおける適応的生活史と固有関数」というタイトルでポスター講演を行った。10年ほど前では力学系モデルを中心とした人口動態、生態系、疫学モデル、社会動態モデルが主流であった。しかし本大会では、昨今の実証研究と理論のコラボの流行に合わせ、分子生物学における代謝や免疫などの実験結果に対する数値シミュレーションが割を占めるようになったと感じた。その結果、解析学や力学系を扱う院生や若手が減ったように思えた。一方で、かつてよりも遺伝子発現や実験系をよく知る若手を目にする。数理生物学（数理人口学も含む）など“数理”が付く分野が数値シミュレーションを中心として変わるのか、数学による理論としてのフレームワークを維持し続けるのか、岐路に立たされているのかもしれないと感じた。

(大泉 嶺 記)

モンゴル年金数理研修「人口・世帯将来推計」の実施

モンゴル国と国際協力事業団（JICA）によるモンゴル社会保険実施能力強化プロジェクトへの協力の一貫として、筆者が2018年10月8～12日の5日間、ウランバートルのモンゴル日本人材開発センターで人口・世帯の将来推計に関する講義を行った。講義内容は人口増加率・ロジスティック増加率・静止人口・安定人口モデルから始め、全国将来人口推計・地域別将来人口推計を経て世帯数の将来推計の手法（世帯主率法、プロペンシティ法、世帯推移率法）へと進んだ。その際、国連人口部の World Population Prospects の推計値とモンゴル統計局による公表値を比較・評価したり、モンゴルの地域人口分布・都市化・結婚・離婚・世帯規模等に関する統計を提示・分析するよう求めた。参加者らの研究発表により、筆者もモンゴルの人口変動について多くを学ぶことができた。

(鈴木 透 記)

欧州統計局主催 将来人口推計と人口動態に関するセミナー

10月13日に欧州統計局（EUROSTAT）のあるルクセンブルグにて標記会合が開催され、日本からは国立社会保障・人口問題研究所から是川が参加した。同会合は主に EU 加盟国の金融、財政、及び労働当局の行政官を対象としたものであり、先進国における最新の人口動態やそれに基づく将来人口推計について理解を深めることを目的としたものである。会合は国連人口部部長の John Wilmoth 氏の基調講演に始まり、ボッコニー大学の Francesco C. BILLAR 氏を始め世界的に著名な人口学者達による報告が行われた。是川も日本の将来人口推計、及び国際人口移動の影響を始めとする重要な変化について報告を行い、多くの関心を得た。

(是川 夕 記)